初公開！

大山寺旧境内 おひろめウォーク開催

8月12日に、大山寺旧境内の国史跡指定答申を記念して「大山寺旧境内おひろめウォーク」を開催しました。当日は天候にも恵まれ、約60人の参加者が、約6キロメートルのコースを歩きました。

大山寺旧境内は、今年6月17日に国史跡指定の答申がなされ、国史跡に指定されることとなりました。今後は「国民の宝」として大山寺旧境内の価値や魅力を伝え、その活用を進めていくことが大切な取り組みになります。

今回はその第一歩として、明治3年（約150年前）の絵図にはすでに描かれなくなっていた旧参道を復活させ、僧坊跡の一部について除草による平坦面の顕在化などを行い、それらを従来の見学コースとつなげて、新たな見学コースとして活用できるようにしました。

中世の大山寺は、広い寺領を有し、最盛期には300人の僧侶がいたとも、14世紀には250もの僧院があったとも伝わります。これまでの調査では160を超える僧坊跡などの平坦地や、それらをつなぐ参道や通路が確認されています。

今回のウォークコースは、僧坊の跡地や参道・通路などをよく見えるようにして、それらを見学しながら歩くことで、隆盛を極めていたころの大山寺の規模の大きさなどを全身で感じることができるようにしました。初めての公開となった今回のウォークでは、旧参道や、きれいに除草されて見やすくなった僧坊跡を歩いていただきました。参加者の皆さんは興味深くガイドさんの言葉に聞き入っておられました。

今後も大山寺旧境内の様々な活用の取り組みを進めていきたいと考えています。

（人権・社会教育課文化財室）

▲大山寺旧境内おひろめウォークの様子

まちのたから（19）～文化財室通信～ 木造阿弥陀如来坐像の巻

今回は大山町前集落内の阿弥陀堂に安置されている木造阿弥陀如来坐像（県指定文化財）を紹介します。

この坐像は像高85・7センチ、寄木造りで、刃物で眼を彫って造った彫眼のもので、表面は漆で仕上げられています。大きさの割に軽量であることから、丁寧な内刳（ぐ）りがなされていると考えられています。

像形は、丸みがかった肩が特徴的で、衣文（えもん）（法衣のひだ）の彫りの浅さ、脚部の張りの弱さから、平安時代後期の作品と推定されています。また、技巧や均整のとれた表現から、中央の仏師の作と考えられています。

平安時代後期の優れた仏像として大変貴重な資料であることから、平成6年4月19日に県指定文化財に指定され、前集落の皆さんに大切に守られています。

※見学は事前に前集落区長への申し込みが必要です。

（人権・社会教育課文化財室）

▲県指定文化財　木造阿弥陀如来坐像